

# 一衣帯水 VOL. 2

**横** 浜市立大学医学部看護学科の皆さん、こんにちは。

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

在校生の皆さん、新学年おめでとうございます。

日本では4月で新学期が始まっていることと思います。北京は氷点下の冬は過ぎ、春めいてきました。中日友好病院の中にある庭園の花々も色付き、患者さんの憩いの場になっています。



中国は9月から新学期です。5月に高校生は大学入試が、

看護学生は看護師国家資格試験が控えており、受験生にとって4月は追い込みの1ヶ月です。

現在北京に来て9ヶ月が経ちました。中国語も少しずつ上達し、活動の幅も広がってきました。今回は同僚紹介と共に私が青年海外協力隊に参加した理由についてお話ししたいと思います。

## 中日友好病院の人々② 馬東菊さん

**中** 日友好病院は1980年から1998年まで、看護師養成学校がありました。馬さんはこの看護学校を卒業し、現在まで中日友好病院で看護師として勤務しています。日本語を学ぼうと決めた理由は、職場の先輩の助言だそうです。日本の病院で2回研修を受け、日本の看護、特に看護管理について関心が高い馬さん。彼女の看護人生をお聞きました。

※看護管理…患者さんや家族により良い看護が提供できるよう組織を管理すること。



1 看護師を目指そうと思ったきっかけは何ですか？

両親が教師をしていたのですが、それ以外の職種に興味を持ち、今年で看護師として働いて27年です。

2 中日友好病院の看護師養成学校に入ろうと思ったきっかけは何ですか？

当時(1988年)、中日友好病院は出来たばかりで綺麗な病院だったため、ここで働きたい！と思い中日友好医院衛生校(看護師養成学校の名前)に入学しました。入学して3年間の間で少し日本語を勉強しました。1991年から中日友好病院で働いています。

### 3 看護学校の3年間がきっかけで日本語を学ぼうと決めたのですか？

日本語を学ぼうと決めたのは、最初に勤務した神経外科病棟の先輩の助言です。先輩は「看護師として働くだけではなく、外国語や専門知識など勉強して、知識をつけた方がいい。そうすると看護師以外の外の世界が見え人生が豊かになる。」と助言をくれました。私はこの時に日本語を学ぼうと決めました。先輩達は若い看護師が勉強することに対しても協力的でした。私が日本語の授業に出られるよう夜勤を交代してくれたことが沢山ありま



した。また当時 JICA 専門家として日本から酒谷先生という医師が来ていました。よく日本語の勉強をするために先生の研究室を訪れていました。

※JICA 専門家とは…豊富な専門知識や技術、コミュニケーション能力を生かし発展途上国で国際協力を行う JICA が派遣する専門家

### 4 学んだ日本語を生かす場面はありましたか？

2001 年から国際医療部の病棟で働き始めました。日本人の患者さんは、日本語が話せる看護師がいることで安心してもらえました。今も日本人の患者さんの診察のお手伝いをしています。

### 5 日本の病院で2回研修を受けられましたが、具体的にはどんな内容ですか？

1 回目は 2003 年から 2004 年にかけて、鳥取県米子市の老人ホームで1年介護について勉強しました。2 回目は 2007 年から 2008 年にかけて、新宿の国立国際医療センターで1年看護管理について勉強しました。継続教育に興味があったため、看護管理を通して看護師の研修について学びました。新人研修は現場で使える実用的な内容だったこと、看護師の経験年数によって受ける研修が違うこと等を知り驚きました。

### 6 看護管理も含め、日本の看護についてどのように感じますか？

日本の看護は新鮮な感じがします。病院内には安全管理委員会・感染対策委員会など様々な組織がありますが、日本ではすべての委員会に看護師が参加しており、どの委員会でも看護師の意見が重視されていると感じました。また、看護部が独立の組織として活動し人事等を行っているのは中国と違うなと感じます。



### 7 日本で学んだ看護を中国でどのように生かしていますか？

日本の看護師はいつも笑顔。仕事はとても忙しいけれど、心が疲れていない印象を受けました。仕事とプライベートを分けて考えるところは参考になりました。仕事のことは家に持ち込まないようにしており、家族からは悩みが少なそうと言われるそうです。気持ちの切り替えが出来ることは大事だと学びました。日本で学んだ看護を後輩の若い看護師に伝えると、みんなとても驚きますが参考になる点が沢山あります。機会を見つけて伝えています。



## 私が青年海外協力隊に参加した理由



中日友好病院国際部の外国語スピーチコンテストにて同僚達と

改めまして、2009年3月卒業に大学を卒業し、現在北京市中日友好病院国際部にて青年海外協力隊看護師隊員として活動している岩崎春香です。今回は私がなぜ青年海外協力隊に参加した理由について、書かせて頂きます。

当時高校1年生だった私は、母親の「手に職」という言葉を受け漠然と看護師になろうと思っていました。そんな時、図書館にあった一冊の本に出会いました。山本敏春さんの「世界でいちばん命の短い国」という本でした。何気ない気持ちで手に取ったその本はとても興味深く数日で読み終え、その後山本さんの本を読み漁り写真展にも行きました。漠然と「看護師になって、いつか人の役に立つ国際協力がしたい」という思いを抱きました。

大学に入り国際協力をしたいという気持ちはどこかにしまわれてしまいました。ですが人の役に立ちたいという気持ちは残り、ボランティア活動に力を入れるようになりました。大学卒業後も看護師として働きながらジャパンハートさんの短期ボランティアやキッズドアさんの貧困家庭学生への学習支援ボランティアに参加しました。ボランティア活動を通して普段経験できないことをし、沢山の素敵な人々と交流しました。ボランティア活動は私の人生を豊かにし、人として成長させてくれました。しかし、日本においてボランティア活動の評価は低いのが現状です。「ボランティア活動とは何なのだろうか?」という気持ちが芽生えました。そんな時、仕事の帰り道、つり革広告で“青年海外協力隊”の文字を見ました。調べてみると、日本の青年を2年途上国に派遣し草の根レベルで活動するボランティアだと分かりました。ここに参加したらボランティア活動とは何か違った視点で考えられるかもしれない、そう思い応募しました。今思うと、どこかにしまわれていた「国際協力がしたい」という気持ちも相まったのかもしれませんが。ありがたいことに合格を頂き、合格発表翌日、速達で書類が届きました。そこで初めて自分がどの国のどんな要請で派遣されるのか分かります。開けて驚きました。まさか自分が「中国」に派遣されることになるとは…。

なぜ私が中国に行くことを決心したのか、また次の機会でお話させて頂きたいと思います。



毎日素敵な同僚に助けてもらいながら活動しています